

2023年10月4日(水)

『 米山奨学生と学友会 』

国際ロータリー第2630地区
米山学友会小委員会
委員長 笠原幸治 様

本年度、米山学友小委員長を務めています。岐阜長良川ロータリークラブの笠原です。本日は米山月間に合わせ卓話依頼を頂きましてありがとうございます。米山奨学生に対しこれまで、多くの支援ありがとうございました。本日は、米山奨学生の活動を知っていただき、さらなる支援につながるよう精一杯話をしていきたいと思っております。

まずは、前回もお話ししたかもしれませんが、新しく入会されたメンバーもごいますので、米山記念奨学事業の概要を簡単に説明したいと思います。

米山記念奨学事業は、日本のロータリー独自の事業で、日本で学ぶ外国人留学生を支援し、世話クラブ・カウンセラー制度で交流を重視し、人を育てる事業であります。

米山梅吉翁は1868年、ロータリーの創設者、ポール・ハリス氏と同じ年に生まれました。遣米使節団の一員としてアメリカ滞在中、ダラスロータリークラブの会員となっていた日本人の福島喜三次(ふくしま きさじ)氏と出会い、1920年に日本で最初のロータリークラブ、東京ロータリークラブを設立しました。そのため、日本のロータリーの父と呼ばれています。

梅吉さんは、日本で初めての信託会社、三井信託株式会社を設立したことで知られています。晩年は、三井報恩会を通じて、ハンセン病や結核の患者を救う助成事業を行い、私財を投じて小学校を設立するなど、人生を通じて常に、奉仕に情熱を傾ける人物でありました。

そして1952年、東京ロータリークラブが「米山基金」の構想を発表しました。これは、アジアから優秀な学生を招いて学費を援助するとともに、二度と戦争の悲劇を繰り返さないために“平和日本”を肌で感じてもらいたい、というものでした。この「米山基金」が、わずか5年で日本の全ロータリークラブの共同事業となり、1967年には財団法人ロータリー米山記念奨学会が設立されました。

米山は、外国人留学生を対象とする民間の奨学金では、国内最大規模です。2023学年度は、日本全国で900人(前年度897人)が採用され、各ロータリークラブでお世話をいただいています。累計では、世界131の国と地域から2万3,509人を支援しています。奨学生の国・地域別の割合はグラフのとおりです。累計では中国、韓国、台湾が多いですが、ここ数年でベトナムからの留学生が急増しており、現役奨学生の中では中国に次いで多くを占めています。

前のスライドで見たとおり、米山奨学生の国籍で、最も多くを占めるのは中国です。想像していたよりも多いな…、そんな印象を持たれる方もいらっしゃるかもしれません。理由は、まず大前提として、日本の大学等で学ぶ外国人留学生のうち47%が中国の学生だということがあります。

米山は、各地区が定める「指定校」から、米山奨学生としてふさわしい留学生を推薦してもらって、そこから地区の選考試験を経て、採用されます。そして、推薦者は誰でも良いわけではな



く、将来の活躍が期待される優秀な留学生でなくてはなりません。実際に面接してみると、「中国の学生はやっぱり優秀」という面接委員の声は多く聞かれます。とはいえ、一つの国に偏ることなく、色々な国の留学生を支援してさしあげたいという思いはあります。各地区では、各指定校に対し、「1カ国30%以内に」などの要望を出して、多様な国から採用するよう努力をしています。

米山奨学生の採用は、全国統一の基準があります。

「将来の目標・留学の目的がきちんとしているかどうか」

「交流への熱意があるかどうか」

「人柄の良さ」

「コミュニケーション能力の高さ」

応募書類の審査・面接審査をおこないます。更にそのうえで、「国籍や県別割合の調整」「地区独自に実施するグループディスカッションの評価」など、地区の裁量を加えて良いことになっています。米山奨学金はお金に困っている留学生の経済支援ではありません。珍しい国だから、生活に困っているから、あるいは、学校の成績が優秀だから……。ただそれだけでは米山奨学生に合格しないのです。将来、日本と世界とを結ぶ懸け橋となって国際社会で活躍し、ロータリーの良き理解者となる人材を育てる事業なのです。

昨年度の寄付金収入は14億2,292万円と、その前の年度から7,700万円増加となりました。上段グリーン色の有価証券の配当金（※1）は、事前の取り決めにより、奨学金にのみ使用しています。皆さまのご寄付はほとんどが奨学金に使われていますが、奨学金以外、例えば地区や世話クラブへの補助費、事業部門の職員人件費などにも一部使われています。米山奨学事業は、規模が非常に大きい事業であるにもかかわらず、管理費は支出のわずか3%です。超低金利時代ということもあり、管理費が利子収入を超えてしまうこともあります。基本的には、利子収入で賄っていくよう努めています。なお、全体で見ると、1億5,400万円の黒字となっており、今後の奨学金事業のために積み立てつつ、計画的に払い出していきます。

米山奨学会への寄付は大きく2種類です。クラブから会員数分を納める「普通寄付金」と、それ以外に、個人・法人・クラブから任意で出す「特別寄付金」です。「普通寄付金」は、かつて米山奨学会が財団法人を設立しようとした際、当時の文部省はなかなか首を縦にふってくれませんでした。そこで、普通寄付金の確約を国内全クラブからもらい、安定財源とすることを約束したことにより、ようやく財団法人の設立の認可が下りたという経緯があるもので、大切な役割を担っています。「特別寄付金」は、任意でしていただくものです。こちらは個人やクラブ、法人の実績となり、表彰の対象となります。米山奨学会への寄付は寄付金控除の対象となり、確定申告をすれば、所得税、法人税の税制優遇を受けることができます。

これは、地区別の個人平均寄付額です。昨年度の全国平均は16,960円で、その前の年度より全体で989円アップしました。最も高かったのは、第2590地区（神奈川県横浜市・川崎市）で27,903円でした。当地区は緑色の矢印のところで、一人あたりの平均は9,647円、全国で31番目のご寄付をいただきました。皆さまのご協力に心より感謝申し上げます。

次は、特別寄付者の割合です。棒の高さは会員数の多さを示しています。会員の中で、個人として特別寄付をした人の割合が黄色い部分です。全国平均は47.3%、当地区は41.0%でした。

巣立った奨学生のOB組織、米山学友会は日本に33、海外に10あります。2023年5月に、新たにベトナム南部（ホーチミン）を拠点とする「ベトナム南米山学友会」が設立承認されました。日本は全部で34地区なので、1つ足りないように見えますが、日本の全地区に学友会があ

ります。(北海道：ロータリー地区は2つですが、学友会は「北海道米山学友会」の1つであるため)

各学友会ではそれぞれ、親睦を深めたり、自主的に社会奉仕活動をしたり、ロータリーの活動に協力したりしています。中でも、米山学友による世界大会は、国内外の学友会が持ち回りで主催する、大きな大会です。今年、つくばで開かれた「再会 in 関東」は、関東10地区の米山学友会による共同開催という形で行われ、学友や現役奨学生、ロータリー会員など、日本国内外から1,209人が登録する大きな大会となりました。この様子は、『ロータリーの友』10月号の“よねやまだより”に詳しく記事が出ますので、ぜひご覧ください。参加した会員からは、口々に「行って良かった!!」と、感動の声を頂きました。次は3年後、台湾でのロータリー国際大会に合わせて開催されます。当地区からの学友会の参加は3名、ロータリアンは2名でした。

米山へのご寄付のほとんどはロータリー会員からのものですが、実は学友も、この事業を支えてくれているのです。米山学友からの寄付金は、累計約1億2,700万円にのぼります。この1億2,700万円以外にも、日本で大きな災害が起きるたびに、国内外の学友から義援金が寄せられています。

当地区の活動です。卓話研修会は米山月間に合わせ、米山奨学生が卓話の練習をします。自身の研究の話ばかりで、こちらが聞いても面白くない話を長々と聞かされても困ります。研究で来ている学生がしたい話との mismatch を防ぎます。母国の懸け橋となるような母国の話、家族等、奨学生の自身の窓を開けていただくことでお互い知り合う場所とします。その後は、懇親会でヒートアップした関係をクールダウンします。入学式で始まり、卒業式で終わります。

学友会はこれまで活動していませんでした。昨年から活動し、学友会と2630地区をつなげる活動をしていきたいと思えます。これにより更なる米山の寄付などの増額につなげたいと思えます。